

## 教科教育キャリアアップフィールド（社会）

コース名：小学校における歴史学習

－受講生のニーズに応える研修会運営のあり方－

社会科教育専修 北 俊 夫  
早 川 万 年

### 1. コース設定の趣旨

本コース名を「小学校における歴史学習」と設定し、社会科教育全般を担当する北と、歴史学（日本史）及び歴史教育を担当する早川が、それぞれの専門性を生かしながら、共同して研修会を企画・運営した。

我が国の歴史に関する学習は、小学校、中学校、高等学校で行われている。我が国において、繰り返し型の歴史学習が展開されている。子どもたちは小学校において我が国の歴史についてはじめて学ぶ。小学校ははじめての学習機会であり、文字どおり歴史学習の入門期である。また、小学校の歴史学習は中学校での内容を易しくしたものといった、いわゆる薄墨論に代表されるように、中学校（歴史的分野）との関連性も課題になっている。こうした現状を踏まえ、「小学校らしい歴史学習」の指導のあり方について実践的に検討し、教師が歴史の授業力を身につけることを目的に本コースを設定した。

なお、大学側がより望ましい受け入れのあり方について検討し、受講者の立場にたって改善・充実させることができるように、平成15年度、16年度において、本コース及び趣旨を継続して設定した。したがって、対象となった受講生は両年度とも小学校の教員であった。

### 2. 受講生の設定した研究主題

受講者の研究主題（課題）は、次のとおりである。A、B…は、受講生を表す。

A…歴史認識を深める資料の活用と授業構成の在り方

B…豊かな社会認識内容を育む指導の在り方～相互作用を核とした授業づくり～

C…よりねらいに迫る教材を活用したねらいを達成できるための指導・援助について

D…指導と評価の一体化をめざした指導の在り方～次時の指導に生きる具体的な評価方法の究明を通して～

E…自ら学ぶ能力を重視した社会科教育について～資料を読みとる力を育てる指導の在り方～

F…社会科 歴史事象への見方・考え方を高めていく子

G…学び合いのある「授業」と「学級活動」を通して

AからGのそれぞれの研究主題を一覧すると、研究の対象や関心が受講者によって多様であることがわかる。これらは必ずしも歴史学習を強く意識したテーマになっていない。しかし、いずれにおいても指導のあり方を追求するということについては、共通の課題意識がある。それぞれ

次のようなキーワードを抽出することができる。

A「資料活用」、B「相互作用」、C「教材」、D「評価方法」、E「能力」、F「見方・考え方」、G「学び合い」——A、C、D、E、それにFは、社会科授業づくりの基本的な要素であり、広義の指導法研究である。それに対して、BやEは、社会科の授業そのものではなく、それを支える学級経営、学級集団づくりに関心と視点がある。

「小学校における歴史学習」というコース名のもとに希望してきた受講生は、校内で校長などとも相談して研究主題（課題）をそれぞれ個別に設定している。それらは各自が日頃の実践から生み出したものであり、強い課題意識にもとづいているものと受けとめることができる。

大学での研修は、個々の受講生の課題意識において共通性と個別性という軸のうえに展開される。大学の設定したコースの趣旨と受講生一人一人の研究課題とをどう関連づけて研修会を運営するかが最大のポイントである。本年度は、昨年度の経験と実績なども踏まえて実施した。

### 3. 大学での実施状況

大学での第1日目には、次の二つについて発表し合い、意見等の交換を行った。

その一つは、各自の研究主題や課題意識等についての発表である。ここでは、まず各自が設定した研究主題に位置づけたキーワードは、社会科の授業づくりにおいていずれも重要なものであることを確認し、課題解決への意欲を継続するよう促した。さらに、社会科授業についての日頃の悩みなども出し合い、子どもに社会科の学力を身につけさせるためには、各自が設定した研究主題を実践的に究明することが重要であることを確認した。

いま一つは、小学校の歴史学習では、(1) 歴史上の代表的な人物の働きをとおして歴史的事象をとらえさせ、時代の特色を理解できるようにすること、(2) 子どもたちにとってははじめての歴史学習であることから楽しい授業にすることを心がけること、(3) 中学校（歴史的分野）の学習との関連を考慮して、あまり難しい内容や扱い方にならないようにすること、(4) 歴史的事象に対するとらえ方や評価などが歴史研究によって変化してきていることなどについて、具体的事例などをもとに講義と協議を行った。

そして、次回の研修会では、小学校における歴史的な内容の単元を取り上げ、各自の研究主題の解明につながるような学習指導案の作成のあり方について協議することとした。大学での第2日目の研修会では、各自が作成し持参した学習指導案をもとに、小学校における歴史学習のあり方について具体的に検討した。当日に提出された学習指導案は次のとおりである。A、B…は、前節で紹介した受講生と同じである。

A…第6学年・単元「伊能忠敬と日本地図」

B…第6学年・単元「戦争を体験した人々の暮らし」

C…第6学年・単元「徳川家光と江戸幕府」

D…第4学年・単元「席田用水—郷土を開く—」

E…第6学年・単元「徳川家光と江戸幕府」「伊能忠敬と日本地図」

F…第6学年・単元「長く続いた戦争と人々の暮らし」

G…第6学年・単元「民衆の成長と社会の変化」

Dの受講生を除いて、すべてが第6学年の単元で、いずれも研修後の二学期に実施されるもの

であった。Gの受講生は低学年の担任であったが、自校の第6学年の学級を想定して学習指導案を作成した。

各受講生は、それぞれの学校において2学期に研究授業を実施することとしている。そのときには本研修会で検討された事項を踏まえて、一部修正された学習指導案にもとづいて実践されたものと思われる。本年度は、そこまでの資料の提供は求めなかった。本研修会の成果が、各学校における研究授業というかたちで発展的に研究実践が展開され、各学校での授業改善に資することができることが望ましい。

#### 4. 実施状況の課題と今後の方向

大学での研修を実施して2年が終えたいま、一つのコースを担当した立場から述べるこつができる実施状況の課題と今後の方向は、次のとおりである。

第一は、大学での研修が、各受講生の1年間の継続的な研修にどのようにかわり、研修の深まりにどのように寄与しているのか。また寄与することができるようにするためには、大学での研修はどうあるべきかを検討することである。

受講生は、1学期の間に校長や同僚、教育センターなどの指導も受けながら研究主題を設定するなど一定の研修を深めている。その成果を大学としてどう受けとめ、継続的、発展的な研修機会をどう提供するかである。そのためにも、1学期間の研修の内容や方法に関する情報が担当者に提供されるような仕組みが必要になる。それは、受講生に例えば1学期間の研修内容を大学での1日目のレポートとして事前に課すことも考えられる。

また、本コースの受講生はすべて2学期に実施される単元の学習指導案を作成しており、各自がそれぞれ自校で研究授業を実施している。研究授業に当たっての学習指導案は、大学での研修を踏まえて一部または大幅に修正されている。担当者は、新しい学習指導案の提供を求めることはできるが、その授業を実際に観察・参観することはしていない。大学での研修成果を検証するためにも、事後の研修がどのように実施されたのか。その後の研修の内容や方法に関する情報が担当者に提供されるようにしたい。

このように各自の研究主題のもとづく1年間の研修の流れのなかで、大学での研修の位置づけと役割を検討し、より望ましいあり方を引き続いて検討していきたい。

第二は、大学の設定するコースと、各受講生が掲げてくる研究主題（問題意識）との関連をどう有機的に図るかを検討することである。

本コースでは、「小学校における歴史学習」を示すことにより、研究主題にもとづいて具体的に実践する場、換言すれば作成する学習指導案の単元を、結果的に歴史学習に限定している。小学校における歴史的内容は、地域の歴史を扱う第3・4学年（岐阜県下の指導計画では第4学年が多い）と第6学年である。このことから、4年や6年など当該の学年を担当していない受講生は、実際に担任していない学年の単元を計画したり実践したりすることになる。このことに意味がないわけではないが、コース設定のあり方もかかわって、このあたりの課題をどうするかも検討事項である。

今後、本コース名を「小学校における社会科授業のあり方」などと設定し、複数の担当者が個別的に相談・助言するなど、受講生のより多様なニーズに応えられるように運営することも考えられる。